

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4095300010		
法人名	株式会社 ケアサポートたんぽぽ		
事業所名	グループホーム こたけ		
所在地	〒820-1101 福岡県鞍手郡小竹町大字御徳115-3		TEL 0949-62-1382
自己評価作成日	令和05年09月11日	評価結果確定日	令和05年11月24日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームこたけは緑豊かな自然に囲まれた閑静な住宅地にあり、【思い】【想い】の花を咲かせ、【暮らし】と【ケア】の提供を心掛けています。細かいことにも気配りできるスタッフがお一人おひとりに寄り添い、精神面・身体面の問題も解決に導くよう努力すると共に、日々笑顔を決やらず、入所者様と愉快地に楽しく過ごせるグループホームです。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

鳥がさえずり、緑に囲まれた自然豊かな環境の中に2012年10月1日に開設した定員9名のアットホームな雰囲気のグループホームである。提携医による定期的な往診と訪問看護師、介護職員との連携で24時間利用者の健康管理に取り組み、看取り支援にも取り組んでいる。調理が得意な職員が中心となって、利用者の食べたい物や季節のメニューを取り入れて手作りの美味しい料理を提供し、利用者大変喜ばれている。20代から60代まで幅広い年齢層の職員がそれぞれの持ち味を活かして助け合い、働きやすい環境の中で職員は定着している。利用者の重度化が進んでいるが、「自分の親を入居させたいと思えるような雰囲気作り」を目指す管理者を中心としたチーム介護で、利用者一人ひとりの思いに寄り添い、面会制限を緩和し、4年ぶりの外出レクを再開する等、「今」を大切に支援に取り組んでいる。元気で明るい職員と利用者の距離が近く、笑いが絶えない暮らしぶりを「こたけだより」で家族に知らせ、家族から多くの感謝が寄せられている、グループホーム「こたけ」である。

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 北九州シーダブル協会		
所在地	福岡県北九州市小倉北区真鶴2丁目5番27号		TEL 093-582-0294
訪問調査日	令和05年11月09日		

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
58	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	65	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	<input type="radio"/>	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66	グループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/>	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/>	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62	利用者は、日常的に戸外へ出かけている (参考項目:51)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:32,33)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	<input type="radio"/>	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。〕

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I 理念に基づく運営					
1	1	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	心に優しいサービスの提供、臨機応変に対するサービスの提供 地域に貢献できるサービスの提供を掲げ、理念を作り、スタッフルームへの掲示やカンファレンスの際に理念を朗読し共有している	「生きていきたいと思える介護・地域と共に支援できる介護・拘束しない介護に努める」を理念に掲げ、リビンググループやスタッフルームに掲示して、いつも黙読している。また、カンファレンス時に読み合わせをして、理念を振り返る機会を設け共有に努めている。	
2	2	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し町内会議に参加するなど地域の一員としての役割を果たしている。町内会議ではグループホームや認知症の理解を求めするために説明会を行ったり、介護の相談を受けるなど地域の高齢者ケアの拠点として情報を提供している。	自治会に加入し、コロナ対策以前は、地域の行事(敬老会・文化祭)や活動に積極的に参加していたが現在は自粛している。毎月行われる町内会議に管理者が参加して情報収集に努め、認知症やグループホームの啓発を行い、介護相談を受ける等、地域の中で大切な役割を担い発信を続けている。	コロナ感染「5類」移行に伴い、小、中学校の体験学習やボランティアの受け入れ、ホームの行事に地域の方を招くこと等、外部との交流を少しずつ再開していく事を期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	町内会議では、グループホームや認知症の理解を高めるために説明を行ったり、介護の相談を受けるなど地域の人々に向け事業所の力を活かせるように努めている。		
4	3	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	定期的に2ヶ月に1回の割合で開催しているものの家族の参加が難しく、利用者参加のみとなっている。行事や生活状況、介護保険制度改正、重度化、ヒヤリハット・事故報告の報告、虐待や身体拘束、大雨や震災等の災害対策など多岐にわたるテーマを設定し話し合いを行っている。	令和5年10月より対面での会議を再開している。小竹町職員、区長の参加を得て、ホームの運営や取り組み、利用者状況、事故・ヒヤリハット、月間目標について報告を行い、参加委員からは、質問や意見、地域の情報提供を受け、それらをサービスの向上に活かしている。	参加委員の増員を図り、会議の内容についても、報告だけで終わるのではなく、地域の課題にも対応出来るような柔軟な会議運営を期待したい。
5	4	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	小竹町福祉課、町内のグループホームと小竹町運営推進会議を開催し、情報交換や交流を図っている。徘徊ネットワークで連絡網を作り日頃から協力関係を築くように取組んでいる。	運営推進会議に行政職員が出席し、情報交換を行っている。行政主催の研修や行事に管理者が参加し、徘徊ネットワーク連絡網に参加して、協力関係を築いている。管理者は、行政担当窓口空室状況や事故等を報告し、疑問点や困難事例の相談を行い、連携を図っている。	
6	5	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	徘徊予防と安全対策の面で、正面玄関、裏口、裏玄関の施錠をしている。利用者の状況のみで外出希望のある方には、その都度一緒に散歩をしたり、お買い物にいくなど日頃から身体拘束を行わないケアをモットーに日々取組んでいる。	「身体拘束等の適正化のための対策を検討する委員会」を年4回開催し、内部研修を年2回実施している。職員は、身体拘束が利用者にと及ぼす弊害を理解し、否定的な言葉を使わない、外出の希望があれば散歩や買い物に出掛ける等のケアを心掛け、職員間で話し合いながら身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	管理者や職員は、日々のケアで声掛けの仕方や介助時などお互いに目配り・気配り・注意を払って虐待防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	6	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の理解を育むために契約時には入居者、家族に説明している。また運営推進会議で説明するなど制度の理解を育み、職員についても学習する機会を設け制度の周知を図っている。	成年後見制度の外部研修を管理者が受講し、伝達研修を行い、制度への理解を深めている。制度に関する資料やパンフレットを用意し、必要時には、利用者や家族に説明を行い、関係機関に橋渡しできる体制を整えている。現在、制度を活用している利用者はいない。	
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には入居者、家族に充分説明し納得して頂いた後印を貰っている。解約や改定の際には入居者や家族の不安や疑問を聞き、充分な説明をしている。		
10	7	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時にはコミュニケーションを図り、意見や苦情を話していただけるような雰囲気作りや関係作りに努めている。	日常会話の中で、職員は利用者の意見や要望を把握している。家族面会時に、利用者の近況や健康状態を報告し、家族の意見や要望、苦情等を聴き取り、ホーム運営や介護サービスに反映させている。また、遠方であったり面会の少ない家族には、電話で頻りに連絡を取り、全員に「こたけだより」を送付している。	
11	8	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者会議やミーティングの際に、管理者は運営に関する職員の意見や提案を聞き反映させている。	月1回、19時から夜勤者以外全員参加のカンファレンスを兼ねた職員会議を開催している。ざっくばらんに話しやすい雰囲気の中、職員の意見や提案が活発に出され、出された内容について話し合い、出来る事からホーム運営や介護サービスに反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	代表者は、管理者や職員の個々の努力、実績を把握しやりがいが持てる職場環境や条件の整備に日々努めている。		
13	9	○人権尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を発揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	性別や年齢などを理由に採用対象から排除しないようにしている。必要な資格・免許などを持ちケアやサービスに関して、思いや価値観が一致し清潔な印象などの条件が合えば採用するなど検討している。	職員の募集は、年齢や性別、資格等の制限はなく、働く意欲や人柄を優先して採用している。管理者は、職員の特長や能力を把握し、適材適所に役割分担し、職員が生き生きと働くことができるよう配慮している。20代から60代の幅広い年齢の職員が互いに助け合い、思いあって働きやすい環境の中、職員は定着している。内部研修を充実させ、資格取得も奨励し、全体のスキルアップに取り組んでいる。	
14	10	○人権教育・啓発活動 法人代表及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	入居者の人権を尊重するために、入居者の訴えや思いを受け止めることを第一に考え担当制を導入している。日々の入居者への声掛け等は、特に職員間で注意するように指導している。	利用者の人権を尊重する介護サービスについて、職員会議や研修の中で、職員間で常に話し合っている。理念にある、「生きていきたいと思える介護」をいつも念頭に置き、利用者一人ひとりに合わせたその人らしい暮らしの支援に努めている。利用者への声掛けには特に注意して、気になった時には互いに注意し合える関係である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	福岡県社会福祉協議会の研修状況を把握し職員が段階に応じて受講できるように支援している。研修報告書があり伝達し取組めるよう努めている。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	小竹町行事を通し、町内の介護施設と交流を持ちホームで困っている点、問題点等を話し合い、今後のネットワークを高め地域に向けて認知症の理解を育んでいきたい。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人が困っていること、不安なこと、要望などに耳を傾け少しでもなじめるように家族の方と連携を図り関係作りに努めている。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族が困っていること、不安なこと、要望をよく聞き、少しでも不安や困っていることが減るよう話し合いの場や電話応対など関係作りに努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所者や家族が「その時」必要としているものを話し合い、職員のカンファレンス等で議題にあげ、支援を見極めるように努めている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	体調不良の際や困ったことがあった際、利用者同士が助け合い、暮らしを共にする上で同士の関係を築いている。		
21		○本人と共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日々の暮らしの中では、入居者のこれまでの暮らしを尊重し、掃除や炊作り、洗濯、家事など家族の方よりお話を聞き、共に本人を支えていける関係を築いている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	11	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの友人や兄弟宅への電話や手紙による連絡、思い出の場所など、いつでも訪ねられるように支援している。	コロナ対策以前は、利用者と職員が一緒にお墓参りや馴染みの店に出かける等、ホーム入居によって今まで築いてきた馴染みの関係が途切れないよう支援してきた。現在は、電話や手紙のやり取りを主に支援し、制限を設けながら面会等、少しずつ再開している。また、利用者同士の支え合う姿や利用者と職員の信頼関係等、新しい馴染みの関係を築いている。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を把握し、リビングの模様替え、レクリエーションやリハビリ一人一人が孤立しないように関わりを支える関係作りが出来ている。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用が終了しても関係性を大切にするため、年賀状や暑中見舞い、電話などで関係性を築いている		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	12	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	職員は入居者の思いや意向の把握に努め、発語など介護日誌に記録し共有化を図っている。また、家族の面会時に生活暦や環境など情報把握に努めている。	職員は、利用者との会話の中から思いや意向を聴き取り、職員間で情報を共有し、日常介護に反映させている。また、自己選択、自己決定が難しい利用者には、家族に相談したり、職員が利用者に寄り添い、利用者の表情や仕草から、思いを汲み取る努力をしている。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方など家族や友人の面会時に聞き取り、スタッフ間の申し送りや会議の際に把握に努めている。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	その人らしく過ごして頂く為、一人ひとりの過ごし方や心身の状況を日誌に記録し把握に努めている。物作りや花壇作りも応援している。		
28	13	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は日々の健康管理などを含め、長期目標・短期目標に応じてきめ細かくサービス内容を記入している。	職員は、利用者や家族とコミュニケーションを取りながら、意見や要望、心配な事等を聴き取り、カンファレンスやモニタリングの中で検討し、利用者本位の介護計画を6ヶ月毎に作成している。また、利用者の重度化や状態変化に合わせて、家族や主治医と話し合い、現状に即した介護計画をその都度作成している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	職員は日々の様子や実績結果、気づきを介護日誌に記録し職員間で情報共有しながら日々の実績や介護計画に活かし、生きて来た証として残している。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	隣接している同法人のデイサービスやケアハウスと合同で行事を行ったりと柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	季節ごとに花の苗を職員と買いに行き、苗植えを行い花の成長を見守ったり出来るように安全で楽しく本人が力を発揮でき花の成長の喜びが出来るように支援している。		
32	14	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者が希望する医療機関での受診を支援している。また、月2回の内科訪問診療・週1回の訪問歯科があり適切な健康・疾病管理を行っている。また訪看とも医療連携を24時間取れるようにし緊急時に対応している。	入居前に利用者や家族と話し合い、希望を優先して主治医を決めているが、現在は全員が往診体制の整ったホーム提携医療機関医師を主治医としており、訪問看護師と介護職員との連携で、24時間利用者の健康管理に取り組み、安心して任せられる医療連携が整っている。	
33		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師に健康状態や日常の変化、気づきを相談し、入所者が適切な受診や看護を受けられるよう努めている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入所者が入院した際には安心して治療できるように各職員や管理者が面会に赴き、病院関係者との情報交換など関係構築に努めている。		
35	15	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化や終末期の看取りについてカンファレンスやミーティングなどで話し合い早い段階から本人や家族と話し合いを交え事業所ですることを十分に説明し共有しあえるように努めている。	契約時に、重度化や終末期に向けた方針について、利用者や家族に説明している。ホームで出来る事について十分に説明し、希望されれば看取りを行っている。利用者の重度化に合わせて、家族や主治医と話し合って今後の方針を確認し、関係者で方針を共有して利用者が終末期を安心して過ごせる環境整備に取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	ミーティングで利用者の急変や事故発生時に備え、対応の訓練を行い実践力を身につけられるように努めている。避難訓練時にも消防署の方々にも積極的に質問・相談している		
37	16	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	職員・入所者の合同避難訓練を年2回実施し、昼夜を問わず入所者が避難できる方法を模索している。運営推進会議でも話し合い地域との協力体制を築いている。	年2回、昼夜を想定した総合訓練を実施し、通報装置や消火器の使い方、非常口、避難経路、避難場所を確認して、利用者全員を安全に一時避難場所に誘導する体制を整えている。また、併設の住宅型有料老人ホームの職員と協力関係を築いている。	以前は準備していたが、期限が切れた後の補充がされていないので、災害時に備えた非常食、飲料水の備蓄が望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	17	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	スタッフ間でも声掛けや言葉遣いに気をつけ、いつでも話し合えるような関係作りに努めている。	利用者のプライバシーを守る介護の在り方を、職員会議や研修の中で話し合い、言葉遣いや声の大きさに注意し、あからさまな介護にならない支援に取り組んでいる。また排泄や入浴の場面では、利用者のプライドや羞恥心に配慮した対応を心掛けている。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の会話の中でヒントや希望を聞いたり、何事も選択できるように働きかけている。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースを大切に、今どうしたいのか、今日はどう過ごしたいのか等、希望に沿って支援している。外出の際、行きたい場所に行き、食べたいものが食べられるようにできる限り努力している。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	往診の際や、隣に遊びに行くときなど身だしなみやお洒落ができるように声掛けを行い本人の希望に沿って支援している。		
42	18	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	野菜の皮むきや、お米とぎ、一緒に味付けをし調理をして活気につなげられるように支援している。食器拭きやおぼん拭きなど出来ることを手伝って頂けるように支援している。	利用者の好きな物、食べたい物を取り入れて、調理上手な職員が中心となって手作りの美味しい料理を提供している。固定のメニューの他に、おでんや鍋料理等、季節のメニューを取り入れ、利用者に変え喜ばれている。残存能力に応じて、お盆拭きやテーブル拭きをお願いしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や栄養バランスはチェック表をみたり水分摂取が出来ているかなど1日を通じて確保できるようゼリーやジュースなどで工夫している。糖尿のある方には、ドクターと相談し主食量の見直しを行った。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の汚れや臭いが生じないよう、毎週火曜日に訪問歯科が往診に来られ、毎食後の口腔ケアはできるだけ本人にさせていただき、できないところだけ支援する。		
45	19	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンをつかみチェック表に記入している。介護度が上がっても自立に向けた支援が出来るよう日中は共同トイレ、夜間はポータブルトイレ使用で自立支援に努めている。	利用者が重度化してもトイレで排泄を基本とし、職員は利用者の排泄パターンを把握し、タイミング良く声掛けや誘導を行っている。手すりの場所、利用者にとってもらう場所、声掛けの仕方を工夫して、トイレでの排泄を支援している。夜間は、オムツやポータブルトイレを使用する等、一人ひとりの状態に合わせて柔軟に対応している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便通のよい食べ物や飲み物・下剤で対応している。また、腹部マッサージや毎日の運動を働きかけ予防に取り組んでいる。		
47	20	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴できる前日に報告している。入浴剤をいれ、楽しく入浴できるように希望に沿ってケアをしている。自分のできることはやっていただく。	入浴は、利用者の希望や体調に配慮し、週2回を基本としている。柚子や菖蒲を入れる等、季節を感じながら入浴できるように支援している。湯船に肩までゆっくり浸かりながら、利用者と職員が一对一で関わり、お喋りをしたり歌を歌ったりして、入浴が楽しい時間となるよう工夫している。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	状況に応じてソファで横になられたり、うとうとされているときはテレビの音を下げ静かな音楽などを流して安心して休息できるように支援している。夜は寝たい時間に休んでいただくようにしている。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬が変わったり副作用など注意することは申し送り帳に記載し変化の確認に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	張り合いや日々の喜びを感じれるように、一人ひとりの生活歴や楽しみごとの支援をしている。お誕生会や行事のときにはノンアルコールビールを提供、園芸や買物好きな事が出来るように努力している。		
51	21	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気や気候の良い時の散歩や一人ひとりの希望に沿って外出できるように支援している。普段は行けないお墓参りや買物など家族と協力しながら支援できるように努めている。	庭に桜の木があり、春には花見をしながら外でおやつを食べる等、気分転換を図っている。コロナ「5類」移行に伴い、感染対策をしながら4年ぶりにドライブに出かけ、三連水車や藤寺を訪れて外でお弁当を食べる等、楽しいひとときを過ごしている。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員は入所者の希望や必要に応じて使えるように支援している。グループホームの行事予定にショッピングモールでの買物を盛り込んでおり、予算に応じて入所者が買物できるように支援している。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	スタッフが代筆したり、希望があれば電話をかけたり、手紙のやり取りができるように支援している。		
54	22	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングは日当たりが良く入所者全員がくつろげる様になっている。また調理中も全体に目が行き届くようになっており、作品や行事の写真を飾り楽しい雰囲気が出せるように努めている。	利用者と職員で制作した作品や笑顔の写真、季節の飾りつけを廊下やリビングルームに掲示し、季節感のある家庭的な雰囲気の中で過ごせるよう工夫している。温かな陽射しが射し込むリビングルームでは、利用者が思い思いの場所でくつろぎ、職員とのやり取りで笑い声が溢れ、楽しい雰囲気の共用空間である。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	リハビリ室に椅子と机を置き談笑したり、カラオケもあり歌を歌ったり、独りの時間をゆっくりと過ごせるようにしている。また玄関先に長椅子を配置し気のあった入所者同士で会話できるように工夫している。		
56	23	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内にテレビや思い出の物を置けるようにしている。各居室は入所者が居心地良く過ごせるように工夫している。居心地よく過ごしていただくためにこまめに掃除を行っている。	入居前に利用者や家族と話し合い、利用者が長年使い慣れた家具やテレビ等を持ち込んでもらい、家族の写真等、大切な物を身の回りに置く事で、安心して暮らすことができるよう支援に取り組んでいる。また、大きなクローゼットがあり、担当の職員を中心に、整理整頓や清掃をこまめに行い、清潔で気持ちの良い居室である。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	浴室・洗面所・トイレのドアに張り紙をすることで自立して生活できるように工夫している。各居室のドアには名前やご本人の写真を貼って目印をつけて入所者が迷わないように工夫している。常に声掛けできる環境を作っている。		